

第22回万国地質学会に出席して

服部 仁

12月のインドは乾燥期にあたり 気候が比較的良好とされている。その1964年12月14日から22日にかけて首都ニューデリーにおいて万国地質学会は開催された。参加国88カ国 地質学・地球物理学・地球化学の各分野の出席者 約1,500名に インドから約500名が加わり盛会であった。この学会がインドで開催されるまでに1948年(第18回ロンドン)と1956年(第20回メキシコ市)に次期開催地に立候補したがいずれも失敗に終り 3回目の1960年(第21回コペンハーゲン)で選ばれ 本22回が実現したのである。したがって この学会のためにインド地質調査所をはじめ関係者の熱意はたいへんなもので 3年も前からこのことに精力を注ぎこんだという噂である。参考までに 万国地質学会の簡単な歴史を表示しておく(表1)。

会場は次の3つに分けられた。

- ① 開会・閉会式や各種委員会が開かれたが 地質図や各種印刷物などの展示場(写真1)にもなり また事務局がおかれた ヴィジャン・パワン(Vigyan

表1. 万国地質学会の歴史

1875	万国地質学会創立
1878	第1回総会 フランス・パリ
1881	2 // イタリア・ボローニャ
1885	3 // ドイツ・ベルリン
1888	4 // 英国・ロンドン
1891	5 // アメリカ合衆国・ワシントン
1894	6 // スイス・チューリッヒ
1897	7 // ロシア・セントピーターズブルグ
1900	8 // フランス・パリ
1903	9 // オーストリア・ウィーン
1906	10 // メキシコ・メキシコ
1910	11 // スウェーデン・ストックホルム
1913	12 // カナダ・トロント
1922	13 // ベルギー・ブリュッセル
1926	14 // スペイン・マドリッド
1929	15 // 南ア連邦・プレトリア
1933	16 // アメリカ合衆国・ワシントン
1937	17 // ソ連・モスクワ
1948	18 // 英国・ロンドン
1952	19 // アルジェリア・アルジェー
1956	20 // メキシコ・メキシコ市
1960	21 // 北欧諸国・コペンハーゲン
1964	22 // インド・ニューデリー
1968	23 // 東欧諸国・プラハ

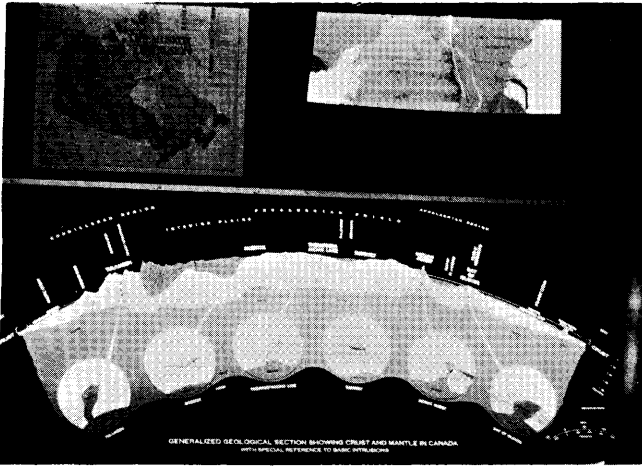
Bhawan) (写真2)

- ② 国際鉱物学会・国際古生物学連合の会場となった国立博物館(写真3)
- ③ 16の専門別分科講演会場となった R.S.J.H.学校である(写真4)。

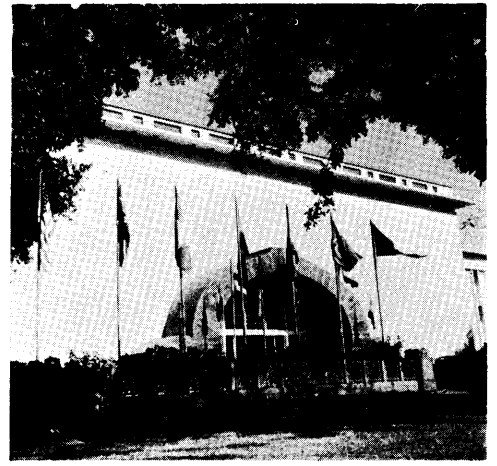
これら会場とおもだった16のホテルやホステルとの間に 朝・昼・夕の3回定期バスが運行され 食事に不便を感じる外国人は 昼食にホテルへ戻れるのでたいへん好評だった(写真5)。3会場のうちで一番大きな建物のヴィジャン・パワンはインドご自慢の1つである。この建物は WHO総会を記念して建築されたのだそうで 科学館という意味をもち ネール前首相が内外記者団との定例会見の場所に使い 亡くなられる1週間前にも自分の健康状態を記者団に語ったという いわく付きの会場だった。

開会式は14日午前11時からヴィジャン・パワン隣接の広場にテント張りで建てられた仮設会場(Pandal) (写真6, 7,)で行なわれ ラダクリシュナン(S. Radhakrishnan)大統領が臨席し すばらしいクィーンズ・イングリッシュで「科学の分野における発展により人間は心(mind)の論理的状態にたどりついたにすぎない。精神(spiritual)資源を動員することにより人間進化が精神解放の段階に到達できるだろう」という哲学的表現で開会の挨拶をした。インドのワディア(D.N. Wadia)博士がこの学会の会長に選ばれ 会長講演を行なった。翌15日から16の分科会に分れて個人講演会が始まり これと時を同じくして また夜間の小集会として たくさんの委員会・小委員会・種々の科学連合およびインド洋に関するシンポジウムとグループ討論会等が行なわれた(概要は地質ニュース124号 1964年12月 35頁に紹介されている)。インドの地質を背景に とくに台地玄武岩・ゴンドワナ大陸・先カンブリア時代の地質・ヒマラヤと アルプス造山運動およびチャーノカイトの分科会が盛況であった(写真9)。

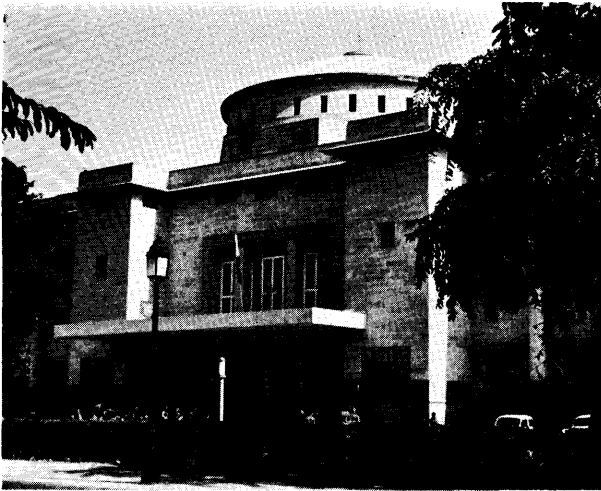
15日午後5時には インド政府主催のレセプションが ラストラパチ・パワン(Rashtrapati Bhawan)という大統領官邸(写真10)の庭で行なわれた。インドでもっとも美しく清潔をモットーとするニューデリーの町は美し



① 衆目を集めたカナダの展示品 地殻と上部マントルの構造を示す断面図でカナダを東西の面で切断してある



② 過去の主催国の国旗がひるがえるヴィジャン・パワン会場（徳永技官提供）



③ 国立博物館 ヴィジャン・パワンのすぐ隣りにありニューデリーの放射状の幹線道路 ジャンパス通りに面している（徳永技官提供）



④ R.S.J.H. 学校の正門（徳永技官提供）



⑤ 昼食にホテルへ帰るための連絡バスを待つ人たち（ヴィジャン・パワン前で）



⑥ Pandal ヴィジャン・パワンの裏側にある広大な庭に テント張りで建てられている 手前はインドの警官

い都市づくりの成果であるが 周囲の町づくりの常識をはるかにこえた広い敷地をもつ官邸は 静けさと壮厳さの中に美しい庭園と建物の巨大さを誇っていた。制服の親衛隊員が通路に立ち並び 各国代表はあちらこちらに輪をえがいて談笑していた。やがて日が暮れかかり親衛隊のラッパの音が国歌をかなでると あたりは一瞬静まりかえった。その中を数人の親衛隊員を従えて現われたラダクリシュナン大統領の姿は まことに印象的であった。大統領はおもだった各国代表の一人一人と握手され 二言・三言学術的なこと・諸国の事情を尋ねられたようだった。残念なことには カメラの携行が一切禁止されていたので写真が撮れず インド職業写真家による黒白スナップ写真を 一枚約 400 円払って入手せねばならなかった(写真11)。

16日午後7時から開会式の行なわれた Pandal で 宝石で身を飾りきらびやかな衣裳をまとった踊り子たちによる 古式豊かなインド舞踊を約1時間観賞したが その踊りをみながら なぜかインドに現在も残されている階級制度のきびしさを思い起こしてしまった。それは想像を絶するもので 憲法では制度廃止を唱えながらも 現実はその存続を支えているような社会構造の根深さを思い知らなければならない。たとえば一軒の家に住むと少なくとも4人の召使いを雇うのが習慣といわれ 運転手・料理人・洗濯女・床の掃除人はお互いに他の仕事

には手を出せず かれらの間には職種による人間差別とその世襲制度が厳然と存在しているのである。その反面交通の障害にもなっている 道路上の牛にみられるように生命あるものを尊重する習慣は これまたたいへんなもので 鳥なども人をおそれず われわれの足許に近寄ってくる。元々宗教精神から出たとはいえ 理解に苦しむ矛盾にみちたインドの一断面をみたような気がした。

18日夜8時 本学会の会長に選ばれたワディア博士が 晩さん会に各国代表を招待した。毎日それぞれの専門別に分科会・委員会などへ散って 多勢の人が一堂に会して 親しく語り合う機会に恵まれなかったので この晩さん会は親睦にたいへん役立ったようだ。

20日の日曜日は会議は一切行なわれず それぞれに近くのオールドデリー見物にでかけたり あるいは会議疲れの身体ながら 早朝から観光バスでニューデリー南方約200 km のアグラ市 (Agra) にある昔の王室の墓—そのうちの1つは有名なタジ・マハール (Taj Mahal) —見物に行ったりで過したようだった。

22日午後3時から閉会式が行なわれ 次の1968年第23回万国地質学会はチェコスロバキアのプラハで開催され 地質見学旅行には東欧諸国の協力が約束されていること またスペンディロフ賞 (Spendiarov Prize) をインド地質調査所長ロイ博士 (B.C. Roy) に贈ること等が決った。ロイ博士は1907年生れで 1958年インド地質調査所長に就任され今日に至っているが 今回の学会の組織運営は高く評価され また世界地質凶委員会の地域別副委員長に選ばれていて ECAFE 地域各種地質図の編集責任者になっている人でもある。

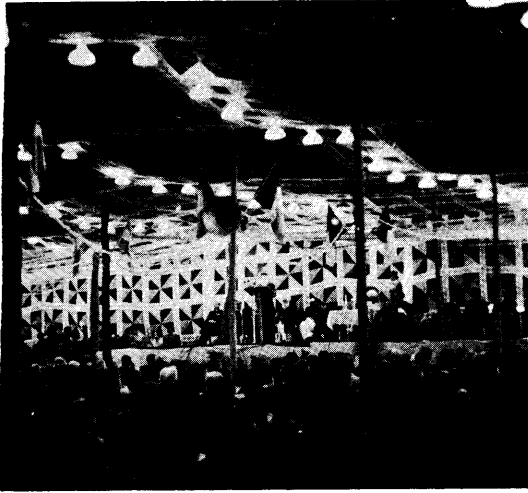
表2 おもな国の出席者数と論文提出状況

分科会	国名	合衆国	ソ連	フランス	英国	西独	カナダ	日本	インド
参加者数		157	108	92	56	49	47	24	約 500
論文数		25	86	21	5	9	11	7	134
1	14	1②	10 ^② / _③ ④⑤		1				1
2	25	1②	6④⑤	1③			1		13 ^② / _③ ④⑤
3	12	1③		1			2⑤	2	3②
4	42	3	6②	2②		2	1	1②	11 ^② / _③
5	51	2②	14 ^② / _③	4②		2	1		20②
6	14		6	1②					4②
7	9		1						7②
8	32	7②	8 ^② / _③ ④	2		2	2	1②	6 ^② / _③
9	19	1		1②					10 ^② / _③
10	38		10 ^② / _④	2 ^② / _③	2		2		17 ^② / _③ ⑥
11	32		6④			1		3②	10 ^② / _④
12	16	1	3 ^② / _⑧	1					10 ^② / _③
13	14	1	3③	1	1				3②
14	13		3②	1					3 ^② / _③
15	23	3 ^② / _③	2	1		2			6 ^② / _③
16	35	4	8 ^② / _③	3④	1		2②		10 ^② / _③

(注) 論文総数 389 ② 連名 ③ 3名の協同研究…
○' ダッシュは件数を表わす

各専門別講演会 (分科会) は 次のテーマにわかれている

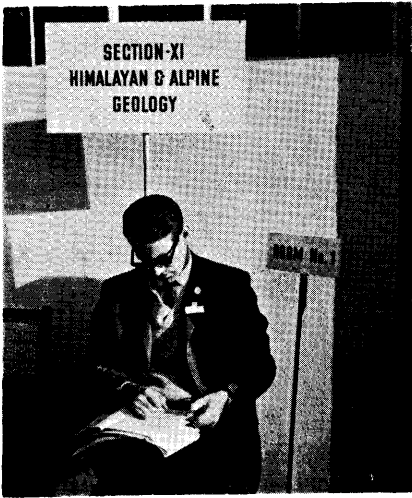
1. 石油地質学
2. 応用地球物理学の地質学的成果
3. 火山活動を含む白亜紀—第三紀の境界
4. 岩石変形と地質構造
5. 鉍石の成因問題
6. ベグマタイト鉱物と成因
7. 台地玄武岩
8. 古生物学と層序学
9. ゴンドワナ
10. アーキアンと先カンブリア時代の地質
11. ヒマラヤとアルプス造山運動
12. 水理地質学
13. チャーノカイト
14. ラテライト
15. 堆積地質学と堆積作用
16. その他の課題 (地質工学・鉍物学・岩石学・アイソスタシーなど)



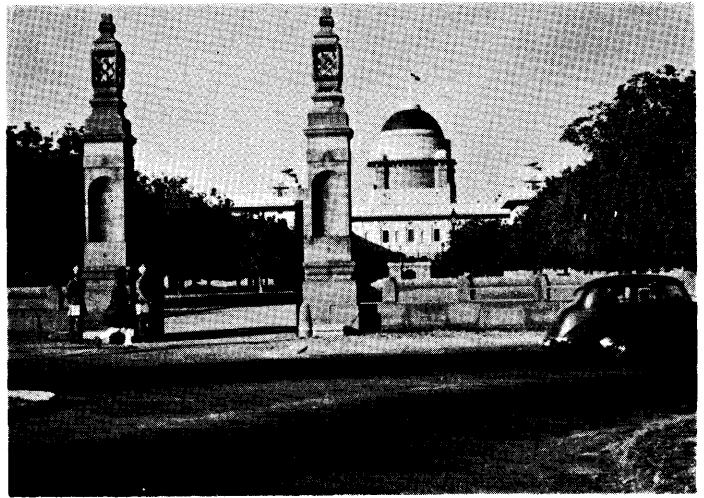
⑦ 開 会 式 場



⑧ 講演の合間の休憩(写真(4)の中庭)



⑨ 講演を準備する人「ヒマラヤアルプスの地質」の分科会会場の前



⑩ 大統領官邸 建材にはたくさんの赤褐色の砂岩が用いられておりこれがニューデリーの町の色彩の特長になっている(先カンブリア時代の砂岩といわれている)



⑪ 大統領官邸に入る人たち

22ND INTERNATIONAL GEOLOGICAL CONGRESS

HINDUSTAN STAMP SUPPLEMENT



Special Stamp

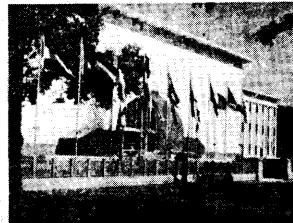
For a full report on the 22nd International Geological Congress, held in New Delhi, India, from September 1st to 15th, 1952, see the Special Stamp Supplement to the Hindustan Standard, published on September 15th, 1952.

INVITATIONS

For a full report on the 22nd International Geological Congress, held in New Delhi, India, from September 1st to 15th, 1952, see the Special Stamp Supplement to the Hindustan Standard, published on September 15th, 1952.



President, Dr. R. C. B. Roy, is a distinguished geologist and member of the International Geological Congress. He is the author of the book 'The Third Oldest Survey'.



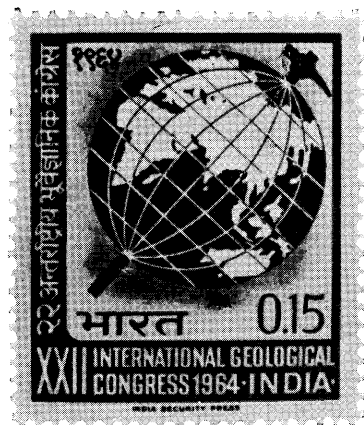
NEW DELHI Sess First In ASIA

By A Staff Reporter
The 22nd International Geological Congress, held in New Delhi, India, from September 1st to 15th, 1952, was the first of its kind in Asia. The congress was attended by geologists from all over the world and was a great success. The Hindustan Standard has published a special stamp supplement to commemorate the occasion.

The Third Oldest Survey

By Dr. R. C. B. Roy, President of the Congress, Hindustan Standard, New Delhi.

⑫ ヒンドスタン・スタンダード新聞の万国地質学会特集号



13) 第22回万国地質学会の記念切手
緑の単色刷り
34 mm×29 mm

このようにして無事学会は終わったのであるが ここに地質見学旅行や各国の論文提出について少し記してみよう。地質見学旅行はこの学会の会期の前後の2回にかけて ニューデリーから10コース カルカッタから11コース マドラスから4コース ナグプールから3コース ボンベイから2コース と合計30コースが準備されどの旅行もほぼ予定人員を満たし盛況であったと伝えられる。なかでもヒマラヤの雄姿に接することのできる北部への旅行 カシミール パンジャブ ダージリン行はたいへん人気があった。会期前にカシミールを訪れた約90名の地質学者たちは不測の雪積に見舞われ 見学終了の出発予定日になっても飛行場が使用不可能で 2週間ほどカシミールに閉じ込められてしまい 辛じて閉会式に間に合うような旅行だった。このためか 各分科会の講演中止が続出したという事である。

ここでもおだった国の出席者数と論文提出件数をざっとながめてみると なかなか興味深いことがいえそうである。今回は 万国地質学会というよりはむしろはっきりにって インド国内地質学会にソ連の学者たちが積極的に協力し 論文を提出しそれらに若干の各国代表が加わったという印象を私は受けたのである。表2からもわかるとおり 約390の提出総論文のうち インド134ソ連86であるから 両者を合すると完全に過半数をこしてしまう。そして 多くの論文が2人か3人の協同研究の結実であること あるいは数人以上の連名で発表がなされていることが注目される。これに反して 英国は5つの論文を 西独は約10の論文を提出しているが いずれも単独研究である点が ソ連やインドその他の国とちがっていて 国民性を反映しているように思えた。

大統領が開会式に臨み演説したことや 外国人受け入れに万全を期したことから判断されるように インド地質学者たちがこの学会に傾けた情熱・努力・自信はまさ

に絶賛に値するであろう。また 国民大衆への広報活動も見のがすわけにはゆかない。主要新聞の1つHINDUSTHAN STANDARD は10ページ建てで 第22回万国地質学会特集号(写真12)を印刷配布した。その内容は 大部分がインド地質調査所のおもだった人たちの執筆で占められ 世界で第3番目の古い歴史をもつインド地質調査所 アジアにおける最初の万国地質学会の歴史 地質見学旅行 国際地質図 化石とその意義 UMP 鉄鉱石 地下水 工学における地質学の役割りなどの解説記事であった。また学会開催を記念する特殊切手(写真13)が12月14日発売され 収集好きな地質学者たちの要望にこたえるのにじゅうぶんだった。

開きづらいインド英語に苦労したり 分科会会場の設備がじゅうぶんでなかったり タクシー運転手に不当に高い料金を請求されたり ホテル設備や食堂での衛生観念の低いことなどに対する不満や不愉快な思いも少しはあったにせよ これほどりっぱに組織し運営された今度の万国地質学会には 文句なしに賞賛の拍手をおくりたい。ある1人のインド地質学者が 日本は東京オリンピックに国を挙げて準備し成功裡に終わったと同様に 私たちもアジアで最初の万国地質学会を開催するのだという誇りをもって その準備に情熱を傾けてきたと語ったのは決して誇張でもなく 彼らの本当の気持を卒直に表現しているように思った。日本において近い将来このような大会を招くことが可能か否かを思う時 今回の万国地質学会は実に多くの教訓を私たち日本人に残したようである。

最後に 日本から学会に参加された人たちの名前を挙げておく(A B C順)。

日本国代表団： 牛来正夫(日本政府・日本学術会議) 市川浩一郎(日本学術会議・大阪市大)・神戸信和(日本政府・地質調査所) 小林貞一(日本政府首席代表・日本学術会議) 小泉光恵(日本鉱物学会・日本学術会議) 松本達郎(日本政府・日本古生物学会・日本学術会議) 湊秀雄(日本鉱物学会・日本学術会議) 砂川一郎(日本鉱物学会・日本学術会議) 高井冬二(第四紀研連) 徳永重元(日本政府・地質調査所) 渡辺武男(日本政府・日本鉱物学会首席代表・日本学術会議)

その他の参加者： 千地万造・鎮西清高・浜田隆士・東中秀雄・平山健・岩生周一・久野久・松下進・西脇親雄・菅原健・棚井敏雅

(筆者は地質部)